

障害者やお年寄りの旅 配慮と工夫

UDツアーアイ 広がる喜び

熊本市の業者が企画

「障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインする考え方」。政府の障害者基本計画では、ユーバーサルデザイン(UD)をそう定義している。UDは商品や建築、表示などの世界で広がりつつあるが、旅行に生き残る企業も熊本市内に現れた。社長の宮川和夫さんは「すべての人々に旅の喜びを味わってほしい」と、社名を「旅のよろこび」としている。

(酒匂純子)

きっかけは旅行会社に勤めていた十二年前。福

祉施設関係者の視察旅

を行った際、障害者

や高齢者が旅行に行きた

くても行けないことを知

つた。「自分たちが調査

の心配に胸も痛んだが昨

年十一月、起業にこぎ着

では」と、こうした旅行

の企画に奔走した。

しかし二〇〇一年九月の米国同時多発テロで旅行需要が急減し、会社は倒産、深夜のトラック運転に職を求めて、その間も

同社の旅の特徴は、徹底した事前準備だ。下見して施設をチェック、参加者には「カルテ」を交付し、身体状況などを書き込んでもらう。例えば嚙下障害があれば刻み食かミキサー食か、刻み食なら大きさは何g、何mlか、などだ。日程は緩めに組み、トイレ休憩を多くする。看護師や介護福祉士らボランティアも参

体はリハビリ、心はリフレッシュ

小学生から70代までの16人が鹿児島県知覧町までの日帰りUD旅行に参加した =5月12日



麦だとあきらめていた。た旅に行くかもしれない」と番地も分からず手紙を出した。宮川さんは

その手紙に動かされ、持留さんの元へ。二人とも知り合いに声を掛け、五月、鹿児島県知覧町への日帰り旅行が実現した。

「私たちには車いすの妻とその夫もいた。この日だけはボランティアが車いすを押してくれた。夫は「普通の観光客になれて、一日優しい気持ちになりました」と語ったと。持留さんは「こんなに涙するほど感動した旅は生まれて初めてだった」と振り返る。

宮川さんは「UDはハートではなくハート。当事者には人生の思い出づくりやリハビリの目標として、家族もリフレッシュに利用してほしい」と語っている。同社は〇九六年(34歳)〇八一一年六月、ホームページは<http://abinoyorokobic.com>